

9. 採卵鶏農場におけるサルモネラ衛生対策と分離法の検討（第2報）

大分家畜保健衛生所・¹⁾豊後大野家畜保健衛生所

○（病鑑）吉田史子・松井英徳・（病鑑）山田美那子¹⁾

【はじめに】サルモネラによる食中毒の発生件数は2002年度をピークに減少傾向にある。一方で近年、採卵鶏農場においてはウインドウレス鶏舎でサルモネラ陽性率が高く、様々な血清型のサルモネラが分離され、清浄化が困難であることが報告されている。2013年に *Salmonella* Braenderup（以下SB）が分離された県内の1採卵鶏農場において、長期的な衛生対策を実施したのでその概要と、サルモネラ検査時に汚染度の低い検体からのサルモネラ分離に有用とされる遅延二次増菌培養法（以下DSE）の有用性について改めて確認したので、その概要を報告する。

【農場概要】鶏舎構造はウインドウレス鶏舎で、卵は集卵ベルトで集卵所に集められ系列のGPセンターへ出荷されている。鶏群は鶏舎単位で廃鶏にしている。

【衛生対策】鶏舎消毒の徹底等一般的な飼養衛生管理の徹底を実施。

【2016年度までの検査】材料及び方法：2013年度から2016年度までに鶏舎環境（壁、集卵ベルト、床、塵埃、餌どい等）、卵、クロアカスワブ、導入元の鶏舎環境、初生雛等から1428検体のサルモネラ拭き取り検査を鶏卵のサルモネラ総合対策指針に基づき実施。

結果：卵、クロアカスワブ、導入元の鶏舎環境、初生雛からのサルモネラ分離陰性。

鶏舎環境171検体でサルモネラ分離。分離血清型は、SB、*S. Thompson*、*S. Rissen*等。

鶏舎環境の陽性率は2013年9% (18/195)、2014年13.6% (33/282)、2015年は3.7%

(3/81)、2016年は40% (111/301)。

【2017年度以降の検査】材料及び方法2017年度から2019年9月までに13回鶏舎環境等690検体のサルモネラ拭き取り検査を鶏卵のサルモネラ総合対策指針に基づき実施。一次培養でサルモネラ分離陰性となった場合はDSEを実施。

結果：2017年度は1次培養で24/305検体、DSEで11/281検体（全体で11%）、2018年度は1次培養で1/265検体、DSEで6/264検体（全体で2%）、2019年度は1次培養で1/120検体、DSEで4/119検体（全体で4%）でサルモネラ分離。分離血清型はSB、*S. Singapore*、*S. Mbandaka*、型別不能等。13回中6回の検査ではDSEのみで餌どい、通路等からサルモネラが分離され、血清型は*S. Singapore*、*S. Othmarschen*等であった。

【まとめ及び考察】2013年にSBが分離された農場において、衛生対策を実施したところ鶏舎環境のサルモネラ陽性率が最大で2016年度の40%から2018年度は2%にまで低減化された。

DSEを実施することによってサルモネラの分離率は向上し、より多くの箇所からより多くの血清型のサルモネラが分離されることが確認された。DSEの実施によって得られる情報を農場での衛生対策に活用していくことで、さらに農場のサルモネラ汚染度低減化及び清浄化につながっていくと考えられた。